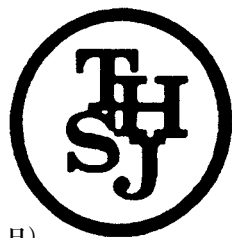


日本ハーディ協会ニュース

NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN

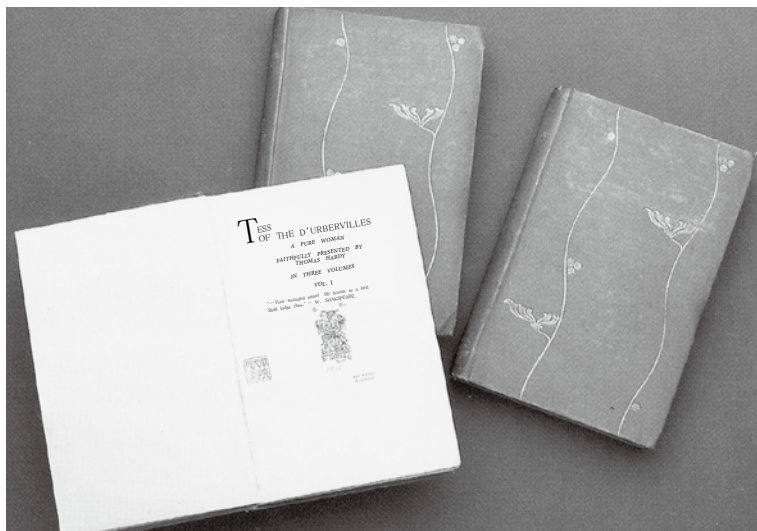


第72号 (2012年9月1日)

発行者 〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

日本女子大学百年館高層棟9階917研究室内 日本ハーディ協会

編集者 〒573-1001 枚方市中宮東之町16-1 関西外国語大学 渡 千鶴子



Tess の初版本 (1刷)

中央大学所蔵 (提供: C.W.)

「我もまたラオディキアに在り」

佐 野 晃

『日本ハーディー協会ニュース』2012年4月号に、内田能嗣先生が「『トマス・ハーディ全集』完訳本への思い入れ」と題して、現今の外国文学古典の個人全集を出版することの困難を語っておられる。長年心中に抱いてこられた先人の意図を実現に向けて推し進めた先生の持続する意志と、それを受けて出版を引き受けられた大阪教育図書の横山社長の心意気に、意義あることを成し遂げるための精神の力の必要性を改めて強く感じた。

全集の評価は、いずれ完結された暁に、第三者の目からなされることだろう。しかし、既刊の巻についても、作家が三人称で書いた『自伝』という作品として、本邦初訳のフロレンス・ハーディの『トマス・ハーディの生涯』が、井出先生の解説付きで出されたのは誠に喜ばしい。

もう一つ嬉しいことは、これまでハーディの長編小説の中でほとんど問題にされず、研究対象としても余り正面から取り扱われることがなかったA *Laodicean*『熱のない人』が、完訳の形で我が国の読者の前に提供されるということだ。

個人的な話だが、私はかつて『開いた精神の軌跡』(1981年、冬樹社)というハーディ論を出したことがある。人間が生きて行く中で、何らかの責任ある行為をするには、対象となる事柄、

それに関連した様々な条件を、理性をもって判断し、意志をもって選択し、行為をなす。一生携わる職業の選択、人生を共に生きる結婚の問題などなど、人生の重要な節目節目に、人はこのような選択と決断をせまられる。ハーディは少年の頃から選択と決断の前提となる「理性による認識」に深い懐疑を抱いた人だったというのが私の論の出発点である。近代以降の社会では、人はローカルな小さな世界で一生を過ごすのではなく、辺鄙な農村にも都会の文化や習慣が入り込み、農村と都市の間の人間、物、習慣の交流が進み、新しいもの、新しい考えに否応なしに接するようになる。ハーディはこれを歴史的に不可逆的な変化と捉えて、そこから彼のモダニスト的な考えを抱くようになった。社会に渦巻く様々なディスコースは、すべて究極的な真実ではなく、その折々のseemingsであるという見解に私たちはハーディの著作の中でよく出遭う。「開いた精神」と言うのは、このような前提に立って、常に自分の思考判断を固定化せずに、更に異なる判断の可能性を残して生きて行かざるを得ない精神の在りようを言い表わしたものである。

このハーディ論を書いて以来、私は『熱のない人』をいつか翻訳したいという思いを持つようになった。それ故、この全集に『熱のない人』が加えられ、私にその訳者が割り当てられた時、何か運命的なものを感じた。「熱のない人」とは奇妙な表題だが、端的に言えば、現実との関わりにおいて、様々に並立する価値観を理解し評価しながら、そのいずれにも熱意をもってコミットすることができない人を意味する。

読者に前もって粗筋をお話するのは興ざめなので、後の楽しみにさせていただくが、作品の顕著な特質を一つ紹介して読者の興に資したい。

ハーディは人物の導入に非常に工夫を凝らし、効果的な印象を演出するが、この作品でも特筆すべき例が、ポーラの前に初めてド・スタンシー大尉が現われて対面する場面である。第3巻第2章、ポーラはスタンシー城のロング・ギャラリーで建築家のサマセットの訪れを期待しながら、壁にかかったド・スタンシー家先祖代々の肖像画に近付き、画像の騎士の一人にふざけて、「友達が欲しいので額縁から降りて頂戴」と頼む。次の瞬間、かつての城の所有者で、今は落ちぶれた末裔であるド・スタンシー大尉が姿を現す。一度は城と旧家を見捨てた彼は、体育場でロープ演技をするポーラを覗き見して、一目で彼女に恋心を抱き、城と家系に関する知識を一夜漬けで詰め込み、この日彼女の前に姿を現したのだ。彼はポーラにあたかも城の主人であるかのように、次々に肖像画について解説を加え、かねて彼が最も似ていると言われていた先程の騎士の肖像の前で、その悲劇的な死の場面を演じて見せる。その迫真的な演技と場の雰囲気によって、ド・スタンシー大尉は一挙にポーラの心の中に入り込む。ゴシック・ロマンスからワイルドに至る肖像画が醸し出す不気味な喚起力が、巧みに登場人物の心理に働き掛ける効果が存分に利用されている。

ところが作者はそのすぐ後で、この演技がポーラを感動させはしたが、それだけで、大尉が詩を朗読しながら、じっと彼女に視線を固定していたのが彼女の心に決してよい印象を与えなかったと補足して、その効果を打ち消している。これは作家の単なる外面的な解説ではない。実はポーラという「熱のない人」の心の動きを表しているのである。

このようにしてハーディは、この大舞台で展開されるロマンスを大仕掛けで語るが、その結びはと言えば、大資産家の相続人ポーラと、誠実で穏やかではあるが、特にどこと言って取り柄のない建築家サマセットがようやく結ばれて、ハッピー・エンドと見えたところでポーラが漏らす「私としては・・・あなたがド・スタンシーの家系であつたらね」という述懐である。そこには、19世紀の大ロマンスを締めくくる大団円はない。悪人のデアも、その父親の失恋者ド・スタンシー大尉も、ポーラの叔父のパワー氏も、叔母のグッドマン夫人も、いつとはなしに消えてどうなったかは全く語られない。これが『熱のない人』の「開いた」（閉まりのない）結末である。

さて、読者の皆さんは『熱のない人』を「口から吐き出そう」とされるだろうか？

科学的階段—ハーディと立身出世

粟 野 修 司

サミュエル・スマイルズの『自助論』は、1859年の11月に出版されるや、その月のうちに3刷、1901年までに50刷を数えるという、当時のベスト・セラーであった。読書家のハーディだから、スマイルズを読んでいて当然と思われるが、不思議なことに『ハーディ伝』でも、彼の作品でも一切言及がない。“self-made man”であるハーディは、1905年までに25万8千部売れた、この本の読者ではなかったのだろうか。『自助論』を織り上げる思想は、スマイルズ独特の二項対立である—「読書よりも労働によって、文学よりも生活によって、学問よりも行動によって、経歴よりも性格によって、人は完全になるもので、これらは常に人類を革新するのである」。ここでスマイルズは成り上がりのイデオロギーを宣言して恥じるところがない。神という言葉に次いで、仕事という言葉の人々が最も頻繁に口にした時代（Walter Houghton, Victorian Frame of Mind）の旗手たるスマイルズの面目躍如たるところであろう。では、ハーディはこういう二項対立をどう考えていたのだろうか。

『エセルバータの手』に出てくるクリストファー・ジュリアンは、「生まれながらの音楽家であり芸術家であり詩人」で、音楽を教えて生計を立てる、出世や野心とは縁のない人物として描かれる。「成人しても何の職業にも就けなかった」この男に、ハーディはしかし、大聖堂のピアノ弾きという職業を与えている。ハーディ自身が『ハーディ伝』で、生まれ変わつたならなりたいたいと書いている大聖堂のピアノ弾きである。『エセルバータの手』は、一般には女性の野心について書かれた小説のように理解されているが、どうしてどうして、これは芸術と男の立身出世についての小説でもあり、こういう見方をすると、周縁にいたクリストファーが中心へ浮かび上がってくる。音楽家という職業について、「生計を立てる手段としてはいくつも欠点があるが、偉大になるための、あの耐えがたい準備（those excruciating preliminaries to greatness）に苦しめられなくてすむ」という一節がこのテキストに挿入されている。ここで言う準備（preliminaries）は「予備試験」などを意味するが、芸術と野心の二項対立の文脈で読むと、高等文官のような国家試験を指すと考えられる。

ハーディにはインド高等文官（Indian Civil Service）を扱った短編があり、そこでも野心の問題が論じられている。「宿命と青いマント」がそれだが、これは短編ながら、移民や植民地支配の問題にも触れていて、読み応えのある作品となっている。主人公オズワルド・ウィンウッドがICS採用試験を賞賛する言葉—「競争原理に基づく試験はなんてすばらしいのだ、そのおかげで、しかるべき人間はしかるべき地位に就くだろうし、劣った人間はもっと落ちていくだろう」—は、スマイルズの立身出世のイデオロギーのコピーである。こういう言葉を、田舎出ながら野心家の主人公の口に上らせることによって、この小品の作者の立ち位置—ポスト・コロニアルで反立身出世—を明確にしていることに注意したい。

ハーディは、この短編の創作に靈感を与えた人物として、ウィリアム・バーンズのアカデミーで、同級生でありライバルでもあった少年の名前を挙げている。その人物、ウィリアム・フーバー・トルボートはオズワルド同様、高等文官試験に合格し、『タイムズ』紙にその名前を掲載されたほどの秀才であった。幼なじみであり、追悼文を書くほどの関係であり、彼の学友中の出世頭であるのに、それをモデルに、ハーディが運命の皮肉を扱う短編小説を書いたことはいささか不思議の感があるが、彼が野心や立身出世に批判的であったことを考えると納得がゆく。

さて、タイトルに挙げた「科学的階段」というのは『ハーディ伝』から採ってある。プロムフィールドの建築事務所に職を得たハーディは、しかし、建築家の仕事をあまり好んではいなかったようである。その憂鬱が『ハーディ伝』1867年の記事に記されている—「彼は社会的な

上昇[立身出世]には尻込みする体質であったから、階段を上ることを科学する（“a science of climbing”）人生よりも、感情としての人生を好んだ」。“a science of climbing”は上昇志向を端的に表している。縁故に頼ったり、運に任せたりするのではなく、計画を立て努力をして、社会の階段を上ることがここには含意されていて、それ自体何ら批判すべき点はない。その意味では、スマイルズの立身出世とほとんど違いがない。「宿命と青いマント」のウィンウッドはICSを使ってこの階段を上ったのである。しかし、それをハーディは好まなかった。やや下って1871-72年には次のように書いている―「ハーディは、科学的なゲーム（a scientific game）としてではなく、感情のみとして人生を好むという彼の生来の性向を抑えることに決めた」。自伝からの二つの引用は、ハーディが感情（emotion）と科学（science）を対立するものと見なしていたことを示している。感情は詩歌、さらには文芸であり、科学は社会での栄達を指していると思なしてよいであろう。

ハーディが自伝や初期の作品で示した、感情と科学という二項対立で職業を二分化し、彼がその狭間で悩んだ理由は、当時の職業のジェンダー化を知らないと理解できない。テリー・イーグルトンは、英文学は女性的な気まぐれであり、女性と連想されるのみならず、男らしくないもの、二流、三流の男の仕事と考えられていたという1877年の王立委員会（Royal Commission）の一委員の言葉を引いている（*Literary Theory*）。セアラ・スティックニー・エリスも趣味を優先して仕事を疎かにする男は、結局債務者監房で趣味の時間を過ごすのに満足することになると書いている（*The Women of England*）。ハーディも文学や音楽がジェンダー化され、女性のもの（“emotion”）に分類されるジャンルであることを十分理解していた。感情を押さえつけて科学あるいは行動を選択することはこの時代の男には強迫観念になっていた。そのような「成り上がり」（self-made man）のディスコースが支配的であった19世紀中葉のイギリスでは、男は人生のために芸術（文学）を克服すべきであるという実利主義が遍く行き渡っていた。そしてこの男のイデオロギーを唱道したのがスマイルズであった。

エリスが仕事のために詩を犠牲にせねばならない男達を同情と哀れみを持って眺めているのに対して、スマイルズは男が直面する現実を肯定して躊躇うところがない。男が貯めた資本は力の源であり、資本があれば男はもはや時間や運命に弄ばれることはないのだとスマイルズは主張していたという。エセルバータとエリスは人生を、それぞれ闘争（struggle）、競争（the race）とみなしていた。これが当時既に定着していたメタファーなのかどうかは断定できないが、男性的なイデオロギーとは人生を競争と見なしてそれに勝利することであり、勝利の報酬は社会的な評価と富であった。ハーディや彼の作品の男性主人公は、「科学」と「感情」の間で思い悩み、躊躇い悩みながらもこのような時代の風潮に抗しきれずに、詩（文学）を放棄したのである。ハーディとスマイルズは文学と立身出世を対立項に置くが、重点の置き所が正反対であることに気がつけば、ハーディがスマイルズに言及しなかった理由は自ずと明らかである。

エセルバータが「男だったらよかったのに」と、女であることを口惜しいと思うのは、彼女がサミュエル・スマイルズの信者だったからで、ジュリアン（やハーディ）がその言葉を耳にして、「やれやれ」と嘆息したであろう。『エセルバータの手』に喜劇という副題がつけられているのは、社会的な野心や立身出世に批判的であったハーディの、エセルバータの上昇志向の生き方に対しての批判が込められているのではないか。

ゴシック小説と「グリープ家のバーバラ」

金 谷 益 道

先日、春風社より上梓した共訳本『クリス・ボルディック選 ゴシック短編小説集』（原著名：The Oxford Book of Gothic Tales）には、ハーディの「グリープ家のバーバラ」（拙訳）が収録されている。十八世紀から二十世紀に亘る主に英米のゴシック短編小説を三十七編（翻訳版では二十六編）収録したこのアンソロジーの序文で、編者のボルディック教授はゴシック譚の属性を以下のように特定し、いかなる基準で作品を選定したのか明らかにしている。

「ゴシック譚は過去の専制（一族への呪い、圧政と迷信の古いかたちの残存）を喚起するの
が典型的であって、現在の希望（ヒロインあるいはヒーローの自由）を窒息させるような重圧
を伴い、その希望は物理的に投獄されるという袋小路の中……にこそある」

「物理的な投獄」と「過去の専制」といったボルディック教授が指摘した要素に着目しながら、
「グリープ家のバーバラ」のゴシック性について短くではあるが述べてみたい。

バーバラが「投獄」される空間は、二番目の夫ロード・アップランドタワーズの大邸宅、中でもその寝室である。アップランドタワーズは、妻バーバラが亡夫エドモンド・ウィローズの美しさを写し取った彫像を自室の隠し部屋で毎夜抱擁する姿に憤り、彫像に手を加え、火傷を負った後のエドモンドの醜い姿を忠実に再現させる。この仕打ちに打ちのめされながらも刃向かう妻に対してアップランドタワーズは、寝室に彫像を運び込み、更におどろおどろしい仕掛けを用意し、サディスティックな「治療」を三夜に亘り施す。

結末部で暴君のような男の手により監禁・迫害される無力なバーバラであるが、冒頭部では父権中心主義的な上流社会に反旗を翻す彼女の強さが目に付く。申し分のない家柄のアップランドタワーズとの結婚を拒絶し、貧しく下賤の生まれであるが桁外れの「容姿の美しさ」を持つエドモンドに熱を上げるバーバラは、身分の低い美しい女性を我が物にし、囲い込んできた男性貴族の伝統的な役回りを奪い取っているようでもある。またそれぞれの血統など「溝のたまり水同然に気にもせず」、自分の身分を失うのも厭わないと両親に訴えるバーバラは、異階級間の恋愛をタブー視する“custom, conventionalities”を取り払い、「対等」な関係を築くことをロチェスターに求めたジェーン・エアの猛々しくも高潔な姿を連想させる。しかし、このような「強いヒロイン」像はあっさりとは崩れ去る。エドモンドを囲う資力を持たないバーバラは、駆け落ち後わずか二ヶ月で親に詫びを入れ、上流社会への服従を全面的に誓うからだ。

バーバラに服従を決意させたのは経済力の乏しさだけではない。バーバラが両親に許しを請うたのは、由緒正しい血統の持ち主ではないエドモンドと一緒にすることに恐れを抱き始めたからでもある。バーバラの息を詰まらせる「過去の専制」は「過去から継承してきた高貴な血統」である。作品名が表すように、バーバラはグリープ家の血統から自らを解き放つことができない。バーバラは、エドモンドとの結婚が「昔からの男爵家の血筋を蒸留した最高の抽出液をいくつも混ぜ合わせた」由緒正しい一族の血統を廃顔させてしまうことを気にし始める。この血統の汚染に対する恐れは彼女の親も抱いており、エドモンドの貴族に連なる血統の調査・発見や、彼を急速に向上させるためのグランド・ツアーの敢行につながっていく。しかし、夫がグランド・ツアーで不在中、バーバラは、彼女の友人たちの豹変ぶりなどから、世間が彼をグリープ家の「血統の廃顔」をもたらすたねだとみなしていることがわかり、塞ぎ込んでいく。バーバラはやがて「血統の廃顔」の恐怖を和らげてくれるものは、夫のアドニスのごとき「容姿の美しさ」以外にはないと悟る。バーバラにとって「彼を選んだ自分は正しかったのだということを確認にしてく

れる」ものは、何より「彼の顔」(“his features”)なのだ。後に夫からの提案で彫像へと変更される「肖像画」を旅先から送るように求めたバーバラの行動は、そのことの証左となる。

しかし、ヴェネツィアの劇場での火事でエドモンドはそのたぐいまれな美を喪失してしまう。バーバラの「血統の廃頹」への恐怖は、再会した彼女に拒絶され家を出たエドモンドが失踪している間に薄らいでいく。エドモンドを拒絶したバーバラは強い自責の念に最初は苛まれるが、「聖墳墓奪回の戦いで大勢のサラセン人を次々と刺した祖先」を持つアップランドタワーズの方が庶民のエドモンドより、世間の目から見れば望ましい夫であることを自分でも認めるようになる。しかし、アップランドタワーズとの愛情なき結婚を果たすと、「血統の廃頹」への恐怖は消え去るが、代わりに「血統の廃絶」への恐怖が生み出される。自分の血を引く直系相続人となる子を熱望するアップランドタワーズは、子を産まないバーバラを激しくなじり、「血統の廃絶」を回避する使命をバーバラに負わせるからだ。

エドモンドが既に死んだという知らせが届いたのとほぼ時を同じくしてフィレンツェから彼の彫像が到着する。彫像の登場で、バーバラは深い悔恨の念に再び責められる。夜毎前夫の彫像を抱擁するバーバラの行動は様々な解釈を誘発する異様なものだが、エドモンドとは違い「血統の廃頹」を引き起こさないアップランドタワーズを再婚相手に選んだことを後ろめたく思っていたバーバラの贖罪のための行動、という解釈は的外れではないだろう。

バーバラと彫像との連夜の抱擁は、アップランドタワーズの子を妻が宿す機会を奪ってしまいかねない。結果的に予期しなかった「新たな病気」を患わせることになるが、アップランドタワーズがサディスティックな治療を続けるのは、不貞な妻を罰するためだけでなく、過去から継承してきた高貴な血統を根絶させないためだ。監禁された寝室の中で、バーバラは醜い彫像を無理矢理凝視させられる。この凝視を通してバーバラは、「血統の廃頹」をもたらすものとエドモンドを恐れ、その恐怖を和らげるものは彼の「容姿の美しさ」のみだと思った自分の本性と向き合う。この後、作品中で最大のゴシック的恐怖が生み出される場面を迎える。アップランドタワーズ邸の閉ざされた寝室で、高貴な血統という「過去の専制」に耐えきれなくなったバーバラはついに発狂してしまう。

以上、「物理的な投獄」と「過去の専制」に焦点を当て「グリープ家のバーバラ」のゴシック性を探求してみた。作品の最後では語り手がメルチェスターの主席司祭が教会での説教にこの話を教訓譚として使ったエピソードを披露している。バーバラにまつわる話は遠い過去の話であるが、物語が語られた時点と無縁のものとして扱われていない。誰にでも起こりうる話として、「グリープ家のバーバラ」は後代と不気味に連結して恐怖を与え続けていくだろう。

ハーディと私 その後

並 木 幸 充

数十年を経てから一人思い出の地を訪れ、雨の降りしき中、車を走らせていくうちに、ふと何気なく見やった坂道のかつての自分自身と若い女性が共に歩んで行く姿を認める。思わずはっと息をつめ、目を凝らしながら二人の行方に視線を向け、その幻影を見極めようとする、失われた時間的距離が如何ともし難く重くのしかかってくる ——

そんな思いを経験するようになれば、Hardyの詩も少しは身近になるんだろうなと感じながら、私は「難解」で知られるその詩集を読み始めたのだった。あれから十数年、今回回らずも「その後」を書く機会を与えてもらったのを機に、久しく中断していたハーディ詩集の再読を試みることにした。

実は初めてハーディの詩をまとめて読んだとき、第一詩集から最後まで刊行順に読んでいて、何よりも面白いと思ったのは前半の詩集であった。とりわけ初期の詩篇に見られる晦渋でいささか奇抜な詩的表現が大変刺激的で、『ゴールデン・トレジャリー』のような模範的詩篇に多少とも辟易していた私にとっては、ハーディの詩は実に新鮮であり、モダンですらあるように思われた。小説家としてよりむしろ詩人ハーディの方を取りたい——こういった思いにすっかりとらわれていた。それには、かつて御大篠田教授が、Wordsworth、Tennyson、ハーディ、Yeatsの四人の名前を挙げ、19世紀イギリス詩にそびえ立つ大きな山並みであると言われたことももちろん影響していたに違いない。しかし後半の詩集になると、ややそうした印象が薄らいでいき、極端な話、最後の *Winter Words* については、初期の作品の持つ密度の濃さがかなり欠けているような気がした。そうした否定的判断が後々非常に気になりだし、どうにも落ち着かない気分になってきたので、機会があれば是非もう一度再訪しようと強く感じていた。

今回無精をしてOxford Authors版ながら、『冬の言葉』から逆順に後半の三つの詩集を読んだ。ハーディ協会会員という身最良で言うわけではないのだが、読んだ詩すべてが面白く感じられ、いわゆるつまらぬ詩というのはほとんど皆無といっていいいくらいであった。これはS. Hynes氏のセレクションが素晴らしかったことも大きな要因だったであろう。しかし実感としては前回とほぼ同じであった。ハーディの詩の modernity とは何なのだろうかという疑問が、私の脳裏を離れなくなった。

70年代に刊行されたオックスフォード版『20世紀イギリス詩選』で、編者の Philip Larkin が、半世紀前までは考えられなかったくらいハーディの詩に多くのスペースを割いている。これはつまり、20世紀の後半になって詩人ハーディの評価は一段と高まり、20世紀詩人としてハーディが重要な位置を占めたことを示している。しかし私にはどうにも判然としない。端的に言って、ハーディはモダン・ポエットなのか。ハーディの後半の詩集からでも、このように言えるのだろうか？ 詩人の詩業はその全体から評価すべきであり、部分だけを取り出してあげつらうべきではないとハーディ自身も言っていることは承知の上で、いくつかの感想を述べさせてもらい、今後の検討課題として自分に宿題を課したいと思う。

ハーディを現代詩人に位置づけるいくつかの先行研究を見てみると、モダニズムをロマン主義の延長線上にとらえて、ワーズワースの遺産をハーディが継承し、それがイェイツや T. S. Eliot につながっていくとする見解がある半面、逆にハーディを反ロマン主義の立場に置き、言語や作風の面で伝統的な詩風への反逆が示されていると主張する見解もある。いずれが妥当なのかは今後森松教授の大著を参照して考えていくことにして、少なくとも後半のハーディの詩集を読むと、何らかの物語性を伴い、直接的感情表現を用いて、詩的空間をパターン化する現象が多く見られることに気が付く。叙述的描写があっても、言語そのものの機能を重視するより、そのあとに伴う詠嘆的、あるいはアイロニカルなコメントによって詩的効果を上げる傾向である。これは明らかに、モダニズム詩がよりどころの一つにしたサンボリスムの手法とは全く異なるし、イマジズム以降の現代詩の展開の上でも時代に逆行するような格好になる。

ところがその半面、ジョージアン・ポエトリー華やかな当時のイギリスにあって、ハーディの詩風があまりにも異端のため拒否反応をあちこちで引き起こしたくらい、ある意味で斬新であったことも否定しようがない。情緒過多とも見えるその詩が、単なるセンチメンタルなロマン派の垂流にならないのは、アイロニーを駆使した巧みな voice や point of view の使用とか、(井出弘之教授年来の持説に近年ようやく私も与することになった) 独特なユーモアの効果、あるいはコントラスト構造など、詩の構成そのものが持つ特徴などのほかに、何か現在見逃している特質もあるような気がする。折を見て、混乱する頭を多少とも整理し、少しでも回答を模索してみたいと思う。20世紀の英米詩をひも解いていくのは楽しみでもあるし、研究論文にはならないだろうが、とにかく未知の世界に足を踏み入れる喜びは無限である。

ハーディと私

信 岡 良 奈

イギリスを代表する作家トマス・ハーディと私の出会いを語る上で大阪女子大学名誉教授の杉本龍太郎先生、帝塚山学院大学名誉教授の内田能嗣先生、帝塚山学院大学に講師で来られていた前田淑江先生という三人の偉大な恩師との出会いは避けて通れないでしょう。

私が初めてハーディ作品に出会ったのは、大学一回生の必修英語の授業でした。この授業を担当されていたのが前田淑江先生でした。当時私が在籍していた学科は英文学科ではなく国際文化学科で、英文学とは全くかけ離れたものでした。しかし、その時履修した授業の教材がたまたまハーディの短編小説“An Imaginative Woman”だったのです。今思えばそれも何かの縁だったのかなあとと思っています。ネット社会の普及とともに近年活字離れ、文学離れという言葉をしばしば耳にしますが、当時学生だった私も英文学という学問に対してどこか古臭い、時代遅れという印象をもっていました。しかし、前田先生の授業で初めてハーディ作品に出会い、ヴィクトリア朝という百年以上も前のイギリスを舞台にしたハーディワールドに、一瞬にして私は魅了されてしまいました。その時の感動、衝撃は今でもはっきりと覚えています。前田先生の授業は座席指定で、毎時間担当箇所の訳の割り当てがあり、授業は緊張感のある静寂の中で進められ私語をする学生などなく厳しかったのですが、私にとってはとても興味深い授業だったので毎週楽しみに受講していたのを覚えています。ヴィクトリア朝文化や私達の生活には馴染みのないイギリスの生活習慣など、とても明快に教えて下さりいつも興味深く拝聴していました。この授業で一気にハーディ作品の虜になった私は、二回生になり選択英語でまた前田先生の授業を履修させていただきました。次の教材は短編小説“Barbara of the House of Grebe”でした。やはり期待通りの授業で、次第にハーディの他の作品や、ヴィクトリア朝という時代、また同時代に活躍した他の作家など、英文学に対してさらに関心が高まりました。三回生が終わる頃には、就職ではなくハーディ作品を研究してみたいと真剣に考えるようになっていました。当時受講していた英文学概論の授業を内田能嗣先生にご指導いただいていたので相談に行くと、色々の確なアドバイスを下さり故郷の広島にある大学院に進学することを勧められました。大学院進学後も内田先生には今日まで、ブロンテカントリーツアーやハーディ読書会などに声をかけていただき大変お世話になっています。途中から参加させていただいた月一回の読書会では、毎回偉大な先生方と一緒にハーディの詩を鑑賞し、時間をかけて一編ずつ議論しながら検証し細かく翻訳していくという作業に携わりました。それが昨年トマス・ハーディ全集の一冊である『詩集Ⅰ』として形になりましたが、私にとってとても良い経験になったと思っています。

内田先生のアドバイスを受けて、大学卒業後は広島に戻り希望の大学院に進学しましたがまたここで新たな出会いがありました。杉本龍太郎先生です。もともと英文学科に在籍していなかった私に英文学の基礎から色々と教えて下さいました。論文指導の時間には、三〜四編のハーディの詩を読む地道な作業にお付き合い下さり、先生の英文学に関する幅広い知識を交えながらとてもためになる授業をご教授下さいました。これも今の私にとっては大きな財産となっています。“An Imaginative Woman”“Barbara of the House of Grebe”という二つの短編との出会いをきっかけに、この両作品で描かれる異なるタイプの女性に関心をもち、そこからハーディ作品で描かれる「女性」と「結婚」というテーマを中心にこれまで私は研究を続けてきました。六月初旬に第二子を出産し、現在私は二児の母親として生活しております。ここ数年は育児に追われ学会や勉強会に出席することが困難となっていますが、ハーディ研究はじっくり長い時間をかけて今後も続けていきたいと思っています。先述しましたように、ハーディ作品には様々なタイプの女性が登場しています。私自身も結婚して出産し現在育児真っ只中ですが、それらの経験によって

自分の社会的立場や一女性としての感情も変化してきていますので、その過程で改めてハーディ作品に触れた時の作品への感想が今後どんなふうに変化していくのか自分自身楽しみでもあります。先に挙げた三人の恩師の先生方との出会いに感謝して、これからもハーディ作品と何らかの形で携わっていけることを願っています。

“Too late, Beloved!”

高橋 和子

毎年毎年猛暑の大阪から逃げ、あちこちを転々。去年は気温16℃～26℃だというだけの理由で冬のオーストラリアへ。ケアンズで初めの二週間余りを過ごした。歩いて二時間もあれば町を一周できる程の小さいリゾート地。一角にちょっと目立つ美術館があり、そこに今ではひとかけらの土地でさえ奪われてしまった原住民、アボリジニの芸術作品(?)が展示されている。その隅っこでOzオペラの『椿姫』上演を報せるチラシを見つけ、生の音楽に飢えていた私は胸がワクワクした。小さな町に似合わずどこからでも見える賭博場の立派なホールはあるのに音楽堂はない。市民ホールの一階がオペラの会場と変わる。お隣の賑やかに着飾った老婦人は16歳の時、ミラノから移住してきたという。オペラが好きでシーズンには、キャンベラやシドニーへよく飛ぶのだそう。

幕が上がリヴィオレッタの声が響く。が、どうもおかしい。いつもと同じ曲なのだが、聞きなれたイタリア語ではない。何と英語で歌っているのだ! プログラムを改めて良く見ると、室内楽により、英語で歌われる、とある。フルオーケストラなど入る場所すらない。初めからただ生の音楽ならそれで良かった筈。にもかかわらず、曲が進むにつれ、ぐいぐいとオペラの中に引き込まれ、貧相な舞台装置、名もない歌い手などのことは一向に気にならなくなる。舞台と客席は一体となり、一喜一憂するその一人となってしまった。

そして第三幕。二人の仲を、自分の娘の為に引き裂いたアルフレッドの父ジェルモンからの手紙を読むヴィオレッタ。「今は海外に居るアルフレッドは許しを求めて貴女の元に行くだろう」と。この後だ、悲しそうに“It is too late”と嘆く。いくら待っても来ないアルフレッド。病気は重く絶望。ヴィオレッタは自分の過去の許しを神に乞う。やがてアルフレッドが「許して欲しい」の第一声と共に現れ、続いてジェルモンも「自分の娘として抱きしめたい」と。だがここでも彼女は“Ah! It is too late.”を繰り返す。ヴィオレッタはもう一度生きようとするが、生命は尽き、幕。

あの悲痛なヴィオレッタの“It is too late”の声を聞く時、それはそのまま何十年も前に声に出して読んだ、あのテスのそれとぴたりと重なるのだった。エンジェルがブラジルから帰国後、テスと再会したあのシーンである。エンジェルは始めにテスに許しを乞う。アルフレッドと同じように。だがテスはただただ“It is too late”というだけ。あのシーンでハーディは4回もテスに“too late”と云わせている。

1889年8月4日付のハーディのJames R. Osgood宛に書かれた手紙によれば、その頃出版しようとしていた小説のタイトルを“Too late, Beloved!”としたい考えだと書いている。そしてそのストーリーの概略(『テス』のストーリー)を述べている。紆余曲折を経、最終的にはTess of the d'Urbervillesに落ち着いたけれども。この手紙から推測できるのはハーディがいかに“too late”に思いを込め、ある意味では、ここにこの小説の核の一つを置いたのではと考えられる。“too late”とは人間がどんなに足掻こうと、どうしようと如何ともしがたい時間の不可逆性に対する言葉、取り返しのつかない人生への無念、絶望への叫びだ。

原因は19世紀頃の英国、ヨーロッパ社会を支配したダブルスタンダードのモラルにある。そしてその元凶は、当時すっかり変化してしまったキリスト教にある。イエスは悔い改めた娼婦、マグラダのマリアを許したのに。ヴェルディもハーディもこのダブルスタンダードに反対の声を挙げ、それぞれの芸術作品により表現し、女性擁護の立場をはっきりさせたのだった。

日本でこのオペラは通常『椿姫』と称されているが、ヴェルディはLa traviata — 『踏み外した女』とした。原作はデュマ・フィスの小説*La Dame aux Camélias* — 『椿の花の貴婦人』であり、その戯曲をバリで見たヴェルディは、グロテスクな部分を捨て、今見るようなオペラに作曲した。一説によれば当時彼は後に妻となるが、未婚の母と同棲して居り世間の冷たい仕打ちを受けたらしい。初演は1853年、フェニーチェ劇場（日本では1939年）。

ところで音楽好きのハーディのこと、あるいは『椿姫』を見たことがあるのではと思いたくなる。1862年～1867年のロンドン時代ハーディは、週に2、3回ハー・マジェスティやコベントガーデン劇場へ通い、イタリアオペラを見たという。ヴェルディの名も挙げている。『椿姫』の英国初演はハー・マジェスティ1856年、コベントガーデン1858年で、その後毎シーズン上演されている。フィドルを買い、下宿の友達のピアノに合わせ、イタリアオペラのロマンチックな曲を練習したとある。が『椿姫』を見たとは書いていない。ヴェルディのものでは『イル・トロヴァトーレ』の名を挙げ、最高の出来だと称賛し、晩年にはその曲が聞こえる度に、意気盛んだったロンドン時代を思い出すと語っている。

英国で初演された頃『椿姫』は勿論イタリア語で歌われたのだが、大衆を守るためだと称して英語には翻訳されなかったそう。今回英語によるOzオペラにより、私はイタリア語では気づかなかったヴィオレッタの、あの悲痛な“too late”の声を、始めて心から聴くことができたことをうれしく思う。オペラ『テス』は1909年コベント・ガーデンで初演され、ハーディ夫妻も列席した。そのオペラを是非見たい。

《シンポジウム予告》 ハーディの面白さ

イントロダクション

廣 野 由美子

もう十数年前になるが、さる英文学界の重鎮により、「ハーディって面白い？」と題する特別講演が、年次大会で行われたことがあった。いささか反語調のこの問いかけの答えがイエスであったかノーであったかは、生憎出席できなかったため聞きそびれてしまった。その後大会報告などをとおして知ったところによれば、主にハーディ嫌いの根拠をめぐって鋭い論議が展開されたようだったが、結局「面白い？」の行方がどうなったのか、それ以来気になっていた。

さて、「好き・嫌い」は人それぞれなので、ここでは置いておくとしよう。しかし、なぜ文学を研究するかと言えば、それはもう研究対象が面白いからに決まっている。だから、「ハーディは面白い」というのが、ハーディ研究者にとっては大前提であるはずだ。そこで、ハーディの面白さとは一体何なのか——この古くて新しい問題を、いま改めて問い返してみたい。なぜ研究するのかという原点に各々立ち返ることによって、作家や作品を再発見し、かつ互いに有益なヒントを得る機会になればと思う。

アラベラの面白さ、ハーディの面白さ

服 部 美 樹

本発表では、『日蔭者ジュード』におけるアラベラの描写に着目し、そこから様々な論点が出てくる可能性を確認することで、アラベラの面白さ、ひいてはハーディ研究の面白さを確認したい。一般に、主人公を中心とした因果関係や時系列で小説のあらすじを捉える場合、細部は軽視

され抜け落ちていく。しかしその細部の描写の中に、作家特有のこだわりや世界観が見いだせる場合があり、作家や作品によっては、そのような細部を重視することで、従来の読み方が修正される可能性もある。『日蔭者ジュード』におけるアラベラも、あらずじでは、主人公を毘にかけて行く手を阻む（どちらかと言えば）悪い女、という見方で片付けられてしまう傾向にあるが、ハーディの細々としたアラベラ描写は、そのような簡略化にはおさまりきらないようなアラベラ像を構築しているように思われる。このような観点から、アラベラに関する情報を拾い直し、ハーディがアラベラを通して表現したものは何か、という問題を再検討することで、この作品の面白さ、また、ハーディ研究の面白さを確認したい。

「不運」の美学

廣 野 由美子

登場人物が不運な出来事の連鎖に巻き込まれ、もがけばもがくほど深みにはまってゆくというのが、ハーディの小説の特色のひとつである。それは私たちに、主人公の願いが次々と実現してゆく冒険物語を読んだときのような、一時的な楽しさを与えてくれることはないし、喜劇的な物語を読んだときのように、爽快な笑いを引き起こしてくれることもない。その代わりにハーディの物語は、登場人物の挫折をとおして、読者に「欲求不満の不解消」という形で、一種のカタルシス作用をもたらし、文学の——そして人生の——「面白さ」をじわじわと味わわせてくれる。そこで、ハーディ作品のプロット展開における「不運」という要素に着目し、その奥にある意味を探ってみたい。本発表では、『帰郷』を取り上げて、ユーステシアやクリム、ヨープライト夫人をはじめとする登場人物たちの「不運」の要因を、科学・思想・文学的効果などの観点から検討し、さらに、ハーディの小説におけるイギリスの特性と非イギリスの特性についての考察へと発展させたい。

ハーディにおける業について

藤 田 繁

「ハーディの面白さ」というタイトルのシンポジウムで廣野由美子さんから講師の依頼を受けたときは、廣野さんからご指名をいただいたというだけで、嬉しくてその場で承諾した。その時に咄嗟に言った、「ハーディの業の扱い方が面白いですね」という言葉が独り歩きして、それが確定してしまった。振り返って見れば、卒業論文 ‘The Cinematic Traits of the Description of Nature in Wessex Novels’、修士論文 ‘The Idea of the Immanent Will—Its Development in Thomas Hardy’ 以下20篇以上の拙論すべてが、私が感じたハーディの面白さを扱ったものであった。今回も「面白さ」の一面を捉えて、ハーディ全体の断面を提示する方法もあるだろうが、もう少し上空から見たハーディの面白さを指摘することが望まれているように思われるので、彼の作品全体を視野に入れて、そこに流れている情念を話してみたいと思う。ここにいう「業」は、厳密な仏教用語としてではなく、「業火」とか、「女の業」とかいった、一般的意味で使いたい。業の深い私がハーディの中の業にとりつかれるのもむべなるかなである。

◎会員の皆様へ司会者からのお願い

「ハーディのここが面白い！」というご意見を一言、下記の要領により、お寄せください。編集のうえ、シンポジウムのさいに、資料として配布させていただきたいと思いますので、奮ってご投稿くださいますよう、よろしくお願いいたします。

●本文：200字程度

●お名前・ご所属をご記載ください。

●締め切り：9月20日（木）

●Eメール送付先（廣野宛て）：yhirono@mri.biglobe.ne.jp

（件名は「ハーディの面白さ」としてください）

《特別講演予告》

英文学を学ぶ／教えるということ——

ハーディを經由した詩人を經由して

高 橋 和 久

伝統あるハーディ協会の講演にお招き頂き、ありがとうございます。光栄に存じます。光栄ではあるのですが、問題はこの講演者がハーディを専門に研究していないことで、いやそんなことを言えば、少なくともこの10年ほど、わたしは何ひとつ、まともに研究していると言える作家や作品はありません。何をしていたかを自省しますと、教育の現場で無意味に悩んでいたというのが実情です。学会当日まで、研究は手につかないと予想されますので、ここで無理に研究者を気取るよりも、失礼は承知の上で、正直に悩みを聞いて頂くほうが身の丈に合っているように思います。

わたしのつまらない悩みを一言で申し上げますと、英文学もしくは英文科の不人気と虚勢かもしれない英文学研究の隆盛とのあいだのズレに、どのように向き合ったらいいのか、という点に尽きるようです。文学の言語は irony, paradox, ambiguity に満ちている、などとは恥づかしくて口に出せなくなってから久しいようですが、教育現場では相変わらず「英文学演習」と称して「英語」を読んでいるのが現状です。それなら少しばかり素朴に先祖返りをしていいのではないか。文学テキストを歴史的文脈に差し戻すという営みの意義を否定するものでは毛頭ありませんが、教室で生半可にそれを実行する（身振りをすると、我身の非力を棚に上げて言えば、学生の文学離れを促進するような気が致します。

という次第（どんな次第？）で、演題は何でも構わない、という玉井会長の有難いお墨付きを楯に、ハーディによって詩人として目覚めたというフィリップ・ラーキンをひとつかふたつ選んで、上記の悩みを具体的にお示しできたら、と思います。まだ何の準備も出来ておらず、どの詩を選ぶかも決まっておられません。ご容赦ください。

《内外ニュース》

会員による研究書・翻訳書：

『英米文学の地平——W. ワーズワスから日系アメリカ人作家まで』 田村一男 監修（金星堂、2012年3月） トマス・ハーディの『カスターブリッジの町長』——カスターブリッジに投影された大英帝国を所収。

『英米文学を読み継ぐ——歴史・階級・ジェンダー・エスニシティの視点から』 新英米文学会 編（開文社、2012年4月） ハーディの「笑い」、メルバリーとジャイルズに見るハーディのダブル・バインド——『森林地にすむ人々』——を所収。

『トマス・ハーディ』 パトリシャ・インガム著、鮎澤乗光 訳（彩流社、2012年7月）

《編集後記》

先日ある学会に学生たちが紛れこんでいた。仄聞によると、「講読」の授業で使用したテキストと同じタイトルの作品が学会の研究発表で取り上げられるので、院生によるその発表を聞いて、自分たちの作品理解がどの程度のものであるのかを判断してみてもどうかと、担当教員が勧めたらしい。レポート提出はあるが、試験は終了しており、授業外活動の範疇にはいるために、レポートは強制ではなく、成績に反映されないようだ。にもかかわらずクラスの半数以上が出席したという。文学離れが進み、人氣が落ちている昨今、この現象をどのように解釈すればいいのだろう。成績に直結しないレポートは無駄だと考えないで、文学作品に魅了され、純粹に、院生の読みと自分たちの読みとを比較したくなったのだろうか。もしそうであれば、文学が健在であることを示す一つの証拠になるのではないか。

次号は4月発行、締切は2月20日、論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度。尚、新編集者は今秋の大会で発表される予定。ご執筆くださいました皆様、ご協力ありがとうございます。心よりお礼申し上げます。